まちか

我がまちを語る

長橋 敏夫さん

天間北1（74歳）

天神さんで地域が和

天間は天間沢遺跡でも知られるとおり、大昔から人が住んでいました。そのわけは豊富な地下水があったからです。昔は水がなくてアワなどをつくった杉田（富士宮市）の人と比べて「天間低くて米のもち」と言い、人々は湧水を誇りとしていました。毎年八月二十四日・二十五日に祭りの行われる天間の天神さんには、水の神様もまつられています。

また、天神さんのお祭りは、地域の融和という意味でも大きな役割を果たしました。

現在の天間は、高度経済成長に合わせて人口がふえましたが、地元生まれの人たちは、ともすれば排他的な一面もありました。

しかし、区をあげて順番に執行する天神さんのお祭りで人々が融和し、今はむしろ地域の行事では、転入してきた人たちが積極的で、活気のある地区となっています。

クローズアップ人

ことしの富士まつりのビッグイベントだった「ミスかぐや姫コンテスト」。杉山さんは「軽い気持ちで参加した」ところ、並みいる美人百二十二人のうちから、見事ミスの座につきました。

参加者中最年少とあって、野に咲くユリのような可憐さは、多くの人の目をひときわ引きました。

「うれしいと言うより、責任を感じています」と本人にとっては意外な受賞で、信じられなかったとか。普段は「チーズケーキとショッピングが好き」という普通の高校生です。

かぐや姫のことは、「小さいころ、お母さんに竹取物語の歌を歌ってもらった」ことが印象に強く残っています。その優しいお母さんは、杉山さんが小学校四年生のときに、不幸にも亡くなられ、杉山さんにとっては、かぐや姫＝お母さんというイメージがありました。

「ミスかぐや姫」を一番喜んでいるのは、天国のお母さんかもしれませんね。

初代ミスかぐや姫

杉山みさき さん

天間南

あの人・この人・こんなこと

富士山を写して十六年

佐野璋二さん（天間南）

富士山と高山植物をカメラで追い続けて十六年。今回、富士山の笠雲の写真で市展の教育長賞を受賞しました。

自宅に富士山観察用の部屋を設け、毎日記録する努力家で、休みの日はもっぱら自然観察に出かけています。自然を写すのは「歩く過程がおもしろい」と言う自然探究派です。

天間太鼓の後継者

中川青己（はるみ）さん（天間北二）

「ドン、ドン、ドドーン」と勇ましい天間太鼓。中川さんは小学校五年生のときばちを握り、ことしで七年目。現在二十二人いるメンバーのリーダーとして、また、天間太鼓の若き後継者として活躍しています。「一生懸命たたいて、聞いている人にわかってもらえたときの感動は何ともいえません」とあどけないひとみがキラリ。

マイペースで楽しむ

天間ジョギングクラブ

昨年の十月、地区のジョギング好きの仲間が集まり発足。

現在、二十人の仲間が週四日、夜八時から、それぞれ三～五㌔のコースをマイペースで楽しむ。

女性が十五人と圧倒的に多いが男性陣は指導的な役割を果たす。

「ジョギングを始めてから持久力がついた」と参加者の弁。今後も長く続けていきたいと言います。